★たった一つの願い事★

アレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
★たった一つの願い事★

【Ｎコード】
Ｎ７１７８Ａ

【作者名】
アレス

【あらすじ】
前からアメリカへ行きたいと思っていた、積木の親友の加奈。そんなある日、加奈が廃校に願い事を叶えてくれるという人（？）がいるのだと積木に報告した。勿論加奈の願い事はアメリカへ行くこと。積木の反対を押し切り、加奈は積木を無理やり廃校へと連れて行れていき、神様（？）にアメリカへ連れて行ってもらう。初めての異国にパニック状態の積木と、恋人探しに夢中な加奈の、二人のアメリカ滞在が始まる。連載中★アメのちクモリ★の冷静な主人公積木と、積木の無二（？）親友の元気な女の子、加奈の番外編。※

実際コメディとアクションですが、どちらかというとコメディに分類されるのでコメディーにしました。

序章「神様に会いに」（前書き）

はい、まだＡＮＣＨＯＲもアメのちクモリも
終わってないのにまた新しいの作って
しまいましたｏｒｚ
終わってからにしろよ、と呆れながらも
是非読んでみてください。

序章「神様に会いに」

「あーあ…アメリカ行きたいなぁ……。」
始まった。積木は溜息を吐いた。
小学生からの幼馴染（？）、加奈が朝の学校で
独り言のように言った。
「加奈さぁ、アンタ英語苦手でしょ？
イギリス行って何がしたいの…。」積木は
呆れながら言った。
答えはわかっていたが……。
「決まってんでしょ、彼氏みつけんのよ！」
加奈も積木に呆れながら言った。
なんで私が呆れられるのさ…。積木は
加奈をみつめ、思った。

積木は年齢が最低三十上しか興味がないし、
加奈は外国人（アメリカ、イギリス）にしか興味がない。
二人ともある意味いいコンビだ。

「一回でいいから行って見たいよ～…、
それでぇ、○ム＝○ルー○みたいな彼氏見つけんの！！」
いや、それは無理だろう。
積木はそう突っ込もうと思ったが、加奈が夢見る視線で
空をみつめているので放って置いた。
「あーあ、神様でも悪魔でもどっちでも
いいから私と積木をアメリカに連れてってくれないかなぁ…。」
うん、ありえない。
しかもなんで私まで入ってるの……。

――――数日後――――

「つーみーきっ！大ニュース！！」
加奈が朝から大きい声で積木の名を呼んだ。
「何よぉ、大声で呼ぶなっ。」
積木は耳を塞いだ。
加奈は早口でその大ニュースとやらを積木に説明した。
「木〇町の廃校あるでしょ！アソコで
夢を一つなんでも叶えてくれる人が深夜０時に現れるんだって！」
いや、それはもはや人ではないよ、加奈。
第一うそ臭いにも程がある。積木は心の中で反論した。
「また……加奈騙されてるんだよ…、んな非現実的なこと
信じないほうが良いってば…。」
「違うよっ、ソレが嘘じゃないの！
三丁目の秋元さんもソノ人に天国に逝ける様願い事を
言って叶えてもらったんだって！凄いでしょ！」
凄いけどソレはヤバイ。ソノ人、人殺しじゃん。
「とにかく！今日早速行こうね！アメリカに行けるぅ、やったぁ！」
積木が困った顔で加奈をみてると、勝手に加奈が予定を決めてしまった。
「ちょっちょっと！勝手に決めないでよ！
そんな遅くに家抜け出せるわけないじゃん！
第一私の夢、アメリカに行くことじゃないし！」
しかし加奈は積木の言葉を遮った。
「大丈夫だって、小母さんには私から言っておくから！
今日早速積木の家行くね！」
ちょっと…、最後の言葉無視しないでください……。

そんな積木の言葉に耳を貸さず、加奈はアメリカへ行けるのを信じ、夢をみながら外をみつめた。

――数時間後――

「小母さーん、こんにちは！」
加奈は元気に積木の母、久美子に挨拶をする。
「あらー、加奈ちゃん、こんにちは。
何時も積木がお世話になって…。」
久美子は笑顔で言う。
いや、お世話してるのこっちのほうだって…。
積木は突っ込もうと思ったが、加奈が久美子にすぐ成り行きを説明したのでやめておいた。

＊＊＊

「……というわけで、積木を暫くかしてもらえませんか…？」
加奈は今までの成り行きを説明し、言った。
加奈、そんな簡単に家出してもらえないって…。

しかし、そんな積木の思いを裏切り、久美子はすぐに顔を輝かせた。
「アラァ、いいわねぇー、アメリカねぇ…、
英語勉強にもなるし！頑張ってきてね！」
いや…、ちょっと待ってください。
親なら深夜０時にソンナ怪しげな人に会いに行くって言ったら反対しますよ、普通。
第一信じんな。
「やったねっ積木！アメリカ行けるよー！」
加奈は元気に笑顔を見せてくる。

だから行きたくないって…。
「でも、加奈ちゃんのトコは大丈夫なの？家でて…。」
久美子は心配そうに訊いた。
積木は久美子の言うように、加奈の親が心配してくれる事を祈った。しかし、
「大丈夫でーす！親には前日に了解得てますので！」
加奈は元気にそういった。
積木は目の前が真っ暗になるのがわかった。

こうして、積木は加奈とともに、アメリカへ行くという願いをもち、ソノ変な神だか悪魔だかわからない者に会いに行くのだった……。

第二章「神様登場？」

「かーな、待ってよ…。」深夜十一時五十二分。
積木は一人、先急ぐ加奈を追いかけた。
「もー、積木遅いよ、願い事叶えてくれる人、
寝ちゃったらどうするのさー。」
いや、ごめん、多分人間じゃないから寝ないわ。
そんな事を思いながらも、積木は加奈を早足で追いかけた。

……此処、学校か…？
積木がソノ廃校をみて一番に思ったのは怖いではなく、
その疑問だった。
赤い屋根、低い天井、チューリップの絵…。
どうみても幼稚園だって……。
「……怖いねぇ。」加奈が冷や汗混じりに言う。
いや、怖くないから。近くのさくらんぼ幼稚園となんら変わりない
だろ。

ミシ…ミシ…流石廃校。
歩くたびに床がきしむ。
やはりちょっと怖いかも。

「ねぇー加奈、何階にソノ『願いを叶えて叶えてくれる人』
とやらは居るの？」
「うーんとねぇーお母さんが言うには二階だよ。」
お母さん…？貴方にコノ胡散臭い噂をふきこんだのは
貴方のお母さんですか…。

積木は加奈の母、保美を心から恨んだ。
小母さん、貴方のせいで私は眠いのを我慢して、
深夜０時に立ち入り禁止の廃校に居ます……。
つーかこんな低い屋根に二階があるのか。

二階――。やはり少し怖い。
積木は手前のひまわりらしき下手な絵が書かれた
ドアを開けた。
…凄いくさい。
腎臓模型、実験器具、ピアノ、机…。
なんか一つ余計なのがあった気もするがまぁいい。

理科室の隣には、タンポポが描かれた
ドアの部屋があった。積木はドアの上をみた。
『一年タンポポ組』
いい加減にしてください。
此処は本当に元中学校か。
何故廃校になったかわかった気がしないこともない。
「あ…ちょっと、積木…、この教室だよ…。」
加奈は積木がドアを開けようとしたのを止めた。
「このって…その神様らしき人がでるって教室?」
「うん。やっとだね…、積木、アメリカだからね。」
加奈は真剣な顔で積木を見詰めた。
いや、アメリカだからねって…、結局私も連れてくんか…。
まぁいいや…、どうせデマだし……加奈も騙されて…。
積木は呆れながらもタンポポ組の教室を空けた。
――すると――
目映い光が…教室中に…、積木は恐る恐る目を開けた。
ソコには……。
教壇に、禿げのオジサンが座っていた…。

アノ目映い光は多分コイツの頭のせいだ。
推定年齢は五十歳だろうか……。
ソノオヤジは女の子が使うような、
ディズニーのミニーが描かれている可愛いブラシで
頭を叩いていた。
間違いない。
血行をよくするためだ。髪が生えてほしいのだろう。

てか―、コイツ誰…？
そのオヤジを観察し終わると、二人がすぐに脳裏に過ぎった疑問が
ソレだった。

「お前達、タンポポ組に何のようだ…。」
そのオヤジはブラシを恥かしそうに隠しながら言った。
ミニーはやはり恥かしいのか……。
「えーと……コノ教室では願い事を叶えてくれる人が
いるみたいで…、だから着てみたんです。」
加奈は遠慮がちに言った。
「願いを…だと…、何故ソレを……。」
オヤジはまだ恥ずかしながらも訊いてきた。
「あの、私、前からアメリカへ滞在したかったんです。
少しでいいので…、願い、叶えてくれませんか？」
加奈はソノ質問を遮って言った。
てかどうやってコイツが願いを叶えてくれるってわかったんだ。
どうみてもただの禿げたオヤジだろ……。
積木は一人、新たな疑問がでた。
「まぁ……叶えてあげぬこともない…。」
オヤジは考えながら言った。
ええっ…コノ人が叶えてくれるの？
「わーありがとうございます！今日すぐにでも行きたいです！」

加奈は頭を下げていった。
「…ただし一つ条件がある。ただたんに
願いを叶えるわけにはいかん。こっちもボランティアじゃないんで
ね。」
オヤジはそういいながらあることを積木と加奈に耳打ちをした。

＞＞禿げを隠したいんだけど…＜＜

積木と加奈は驚いたような呆れたような顔をした。
「いや、実はね、前来た秋元さん、彼にも
同じ質問したんだけどさー、それがコノブラシでやる
血行を良くする方法なんだけどさー、もう三日も続けてんだけど効
かなくてさ…
なんか良い方法ない？」
オヤジはいきなり馴れ馴れしく言った。
「○ーブ2○に行ってみればどうでしょうか。」
積木はすぐに言った。
「……何処そこ？」オヤジは当然のように訊いた。
「うーん、まぁそんな所があるんです。○田ア○子がＣＭしている
…、
まぁ詳しくはＣＭみてください。」積木は早口に言った。
とにかくコノ禿げとの会話を終わらせたかった。
オヤジは少し考え、言った。
「……よし、わかった。早速今日、アメリカへ連れて行ってやろう。
」
ええっ、行くことになっちゃったよ…。
「あの、いきなりでも困ります。お金の問題だってあるし…。」
積木は当たり前の事を言った。
「ふむ……ソレもそうだな…。よし、ではクレジットカードを
あげておこう……。払うの嫌だからあまり使いすぎないでね。あ、
あと家も用意しておくから。以前僕が住んでたところ。」

いや、待て。話が早すぎないか？つーか行きたくないよ…。
そんな積木の思いも知らず、加奈は目を輝かせる。
「よし…あ、あとねー心配だから三日に一回様子見に行くからー。」
オヤジはなんでもないように言い、英語がたくさんかかれた
青色のカードを渡す。
「はい！宜しくお願いします！」加奈はまた礼をした。
ヤダ……マジで行かせる気だよ…コノ人。
行きたくない、行きたくないーーー助けてーー。
積木の最後の言葉は誰にも届かず、今度は本当に目映い
光が前にみえ、積木と加奈は意識を失った……。

第二章「神様登場？」（後書き）

はい、二章目ですw
次からいよいよ、積木と加奈のアメリカ生活が始まるのでご期待ください。

第三章「アメリカ！？」

「…アメリカっアメリカ！積木アメリカ！」
「此処…何処…。」
私はゆっくりと目を開けた。
自然に目が開いた、というよりあけさせられた、のだ。
目の前の加奈が、積木の頬を面白そうに突っついている。
なんで加奈が……、ああ、そうか…今日は修学旅行か……。

…じゃない。なんでコイツがいるんだ。
第一修学旅行だとしてもクラスが違うだろう。

「加奈っ、なんでいんの！？」
「あ、起きた。ねぇーみて！アメリカだよ、アメリカ！」
加奈は起きたばかりの私に、理解不能なことを言う。
「アメリカ…？」
「そう！見て！コノ部屋！アメリカでしょー！」
私はそう言われ、この謎の部屋を見渡した。

……確かにアメリカだ。（？）

でも、日本にもないとは一概に言えない。第一信じられるもんか。
いきなりのモーニングコールがアメリカって何だ。

「まさか…なんで行き成りアメリカでてくんのさ…冗談やめてよ…。」

私はそういって、また寝ようとする。
「ダメだって！アメリカ忘れたの？ホラ、神様の…。」
……！！神様！アレは夢じゃないのか！
積木はハッキリと思い出した。確かに昨日（？）、神様にあったような…。
つーかアレ神なのか。神と髪をかけたギャグとか…。

なんてコト言ってる場合じゃない。
積木は無我夢中で、私の目の前に座っている加奈を倒し、
朝日を振り込んでいる窓へと猛ダッシュした。
カーテンを開け、窓を思い切り開け放つ。
…まさか…。
積木が見たソノ光景は、完璧に積木の家の周りの風景ではない。

いや…でも、アメリカとは限らない。日本の何処かだ…。
積木はそういって自分を落ち着かせようとした。
「積木、アレ。」加奈がいつの間にか私の前に居て、
開け放された窓の外を指す。
そこには木製の長方形の看板。
「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｓｈｉｂｕｃｅｎｅ」シブカネってなんだ、シブカネって。

そんな疑問を浮かばせている場合じゃない……。英語、だ…。
土地も日本離れしている…。此処は……アメリカだ…。

「いやだーーーーーーーーーーーー！！」積み木は突然奇声を上げた。

「ちょっ、いきなり叫ばないでよ！」加奈は耳を塞ぐ。

「なんで…なんで…アノ…オヤジは…何処さ…！」

積木は我を忘れ、加奈の襟をつかむ。

「痛いよ…積木…っ、アノ神様は知らないよぉ…、でも、あと三日で戻ってくるって。」加奈は苦しそうに言う。

「三日も待てない！なんでアメリカなのさ…！

私は行きたくないって言ったじゃん！」積木は加奈の襟を放し、しゃがみ込む。

積木はその場で暴れまわった。

つーか…アノ禿げが悪いんだ…、アイツがアメリカにつれてくるから…。

アイツやっぱ悪魔だ。

積木は日本から遠く離れたアメリカの、

開け放たれた窓から降り注いでいる朝日を浴びながら、ハッキリと言った。

第三章「アメリカ！？」（後書き）

とうとうアメリカです（？）

感想・評価
よければお願いします♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7178a/

★たった一つの願い事★

2010年10月20日17時36分発行